専念寺通信

一月号（NO．１１３）

http://sennenji.s.296.xrea.com/

明けましておめでとうございます。みなさま、お健やかに新しい年をお迎えのことと思います。今年もどうぞよろしくお願い致します。

一枚起請文

法然上人は９か月におよぶ讃岐、土佐への配流の生活から１２０７年、赦免され、摂津の勝尾寺で４年を過ごしたのち、ようやく京都入りを許されました。７９歳でした。弟子の慈円のはからいで大谷の禅房（現在の知恩院勢至堂）に住むことになりました。しかし、ほどなくして病の床につき、随従の弟子源智が「肝要の所存、ひとふであそばされて、給わりて」と願い出たところ、上人は一枚の紙に次のような文言を書き遺しました。のちに一枚起請文と呼ばれる２７３文字からなる文です。以前に一度、ご紹介いたしましたが、この年の初めにいまいちど掲載させていただきます。

もろこしわが朝に、もろもろの智者たちの沙汰申しさるる観念の念にもあらず、また学問をして念のこころをさとりて申す念仏にもあらず、ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがひなく、往生するぞとおもひとりて、申すほかには別の子細喉はず。ただし三心四修と申す事の喉は、みな決定して、南無阿弥陀仏にて往生するぞとおもふうちにこもり喉なり。このほかにおくふかき事を存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ喉べし。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学するとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじうして、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし。

もろこし（中国）や、わが朝（日本）には「もろもろの智者」がおおぜいいて仏教研究に励んでいました。法然上人自身、１３歳で比叡山に登り、１５歳で出家し、天台６０巻を一心に勉学しました。しかし、比叡山に象徴される特権的な智者の議論、研究結果は、普通の庶民の苦しみを少しも救うものではありませんでした。

当時の比叡山は、藤原家の権力の影響を強く受け、仏教者のための、立身出世の場と成り果てていました。この矛盾を法然は鋭く突きました。「観念の」ための念仏でなく「学問の」ための念仏でなく、ただ、ふつうの人が、文字が読めなくとも、南無阿弥陀仏ととなえる、それ以外のこまかいことは必要ないのだ、と。三心（さんじん）だ、四修（ししゅ）だ、と分析に明け暮れることも必要ない、念仏をとなえる以外にまだまだあるはずだ、と奥の深いことについて議論したがることは、阿弥陀仏、釈尊の慈悲にはずれ、衆生を救おうとする本願にもれることなのだ。また、たとえ、一代の教えを良く学んだとしても、それでもひとは「一文不知の愚鈍の身」に過ぎないのだ、と。知識の多い少ない、はその人の「救い」とは何の関係もありません。この時代、比叡山などで学問をすることが許されなかった尼入道を、知識のない人のたとえとしてあげ、知識がないのに智者のふるまいをする人間を批判しています。自分の知識、社会的地位、富から離れて、一心に祈る時、「救い」は得られるのでしょう。世界を知っている、素晴らしい知識が自分にはある、と自負している人こそ、智者の振るまいをせず、念仏をとなえなさい、と法然上人は死の前に書き遺したのです。

年の初めに、この「一枚起請文」を読み、めまぐるしく変化する新しい時代に、私たちは自分だけの平常心を持って臨めればと念じています。どうぞ、良い一年となりますように・・・。

平成２２年１月１日　大黒